

過去は、情報の宝だ！ 歴史を経営の指標とせよ

ライズコンサルティングオフィス
酪農コンサルタント

加藤 隆

二〇〇四年の夏、戦後六〇年の酪農業界（ミルク）サイクルを、弊社の情報機関紙「ユーステター」で取り上げた。すると読者より「先ことはわからん」とご指摘をもらったことがあった。

確かに先のこととはわからない。その通りである。しかし、二〇〇六年の生産調整問題が現実となったことを考えれば、読者のように、「先のことだから」と無視してしまつてよかつたのだろうか？ そして、将来も無視していくことがいいのだろうか？ と疑問を呈する。

単に生産調整は一過性のもので終わるものではない。なによりも、あなたの経営に急ブレーキをかける。さらに、あなたの人生設計を狂わせる可能性すらあるのだ。

なぜなら、投資が必要な酪農産業には潤沢な資金がいる。そのため、農協の許可を得、資金を借り入れ、投資をする。しかし、そこまでの許可を得られたとしても、最後まで責任を持って生乳を買ってくれるという保証はないということが、生産調整が起こるたびに再認識できる。

最後はやっぱり、自分で責任を取らなければならない。つまり、借りた金の返済は待つてもらえないからだ。

そこで、もし仮に、過去に起きた事象、つまり、歴史を学び、ミルクサイクルという事象をつかむことができていたなら、過剰な投資を控えたことだろう。

それだけ経営者にとつて、未来の予測は経営の根幹に大きく関わる。未来がある程度予測できるといふことは、投資の時期が見えてくるはずだ。

これだけ重要な事柄を「先のことはわからないから…」と本当に無視してよいのだろうか？

人間はなぜ同じ過ちを繰り返すのか？

それは、「多くの人は、今起きていることは特別なことだと考える。それは、過去より現在の方が何事においても進歩しているからだ。そう言う物事の捉え方は、傲慢に近いのだ」と、多くの識者は述べているが、私も同感だ。

科学技術が進歩しても、人間本来の傲慢さの進歩は難しい。先代で起きた事象は過去のことであり、古いことだと、多くの人は、それを教訓としない。

未来を予測するには、過去をよく観察する必要がある。過去の経済的現象や経済的關係に見られるパターンは、必ず、繰り返す。過去には、多くの有用な情報が詰まっているのだということを得ることができようかどうかだ。

二〇〇六年の生産調整問題も、その後何年か経ってしまえば、過去の出来事となる。「そう言えば、生乳廃棄があつたなあ」と昔話となってしまうのだ。

11の問題をこれから酪農経営の教訓とするためには？

そのためには、しっかりと勉強し分析することが必要なのである。

つまり、当時、どんな人が一番苦しんでいたのか？そして、どんな人がまったく影響を受けなかったのか？当時の生産調整は、どんな経緯で生乳廃棄となつたのか？生産調整が決まる二年ほど前には、どんな小さな問題（サイン）が出始めていたのか？

二〇〇七年以降、補助事業が併設されているため、牛舎増築や新築が進むだろうと思っている。さらに、穀物・原油などの値下がりが見えてきたことによつて、北海道を中心とした主産地の生産は回復すると見ている。しばらくは、増産が続くだろう。

ただそれは、未来もずっと続かないということを経営に銘じて経営を進めていかなければ

ればならない。良い時と悪い時があるのだ。その繰り返しなのだということを忘れてはならない。

そのようなことを考えると、自分はどんな財務内容になっていけば、不測の事態、突如の収入減を強いられても影響を受けずに経営を進めていくことができるのか、それがわかるはずだ。

わかつたらそれらを忘れないうちに書き残し、それに向けて、すぐ行動を起こすことだ。実践することだ。

とくに生産調整や資材高騰の経験のない若い後継者や新規就農者は、将来への不安が少なからずあることだろう。

だが、ここは良い勉強だと思って、しっかり現在の事象を脳裏に強く焼き付けておいてほしい。このことは、あなたたちのこれからの酪農経営にきつと役立つはずだ。

楽しい酪農、魅力ある酪農を営むには、心に余裕が必要だ。その余裕は、どこから生まれてくるかを考えてほしい。牛にやさしくできるのは、心に余裕があるからである。もちろん、人へも同じだ。

是非、先を読む目を養って、あなたの経営に生かしてほしい。

二〇〇八年十一月九日